

鉄虎堂電子拾遺 3

丸吉皆川家日誌 明治二年

佐藤大介 編・著

本書（PDFファイル）の利用にあたって

1、本書の著作権者は佐藤大介です。

2、本書に用いられている情報を利用する場合、書誌情報および掲載URLの表示をお願いします。

また、本書の情報を再利用する場合には、機械的な解析処理等に用いる場合を除き、改変を認めないものとします。

商用利用についても認めないものとします。

3、本書の印刷・出版に関する諸権利は、編者に属します。本PDFファイルの組み版のまま、およびテキストデータを抽出して別途版下を作成し、印刷・頒布・出版することは認めません。

4、本書の内容を用いた学術、教育、文化活動などで成果物を出された場合、1部の提供をお願いいたします。

*クリエイティブ・コモンズ・ライセンス CC BY-NC-ND

<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>

鉄虎堂電子拾遺 3

丸吉皆川家日誌 明治二年

発行日 二〇二〇年三月三十一日

発行者 佐藤大介研究室

〒九八〇―八五七二

宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉四六八―一

東北大学災害科学国際研究所 佐藤大介研究室

〇二二―七五二―二一四三

dsato@irides.tohoku.ac.jp

編著者 佐藤大介 青葉山古文書の会

制作所 蕃山房

* 本書は、文科省科研費・基盤研究（B）課題番号 19H01293

（研究代表者・佐藤大介）による成果の一部である。

鉄虎堂電子拾遺

丸吉皆川家日誌 明治二年 目次

本書の利用にあたって

凡例

明治二年一月

明治二年二月

明治二年三月

明治二年四月

明治二年五月

明治二年六月

明治二年七月

明治二年八月

明治二年九月

明治二年十月

明治二年十一月

明治二年十二月

70 67 63 58 51 46 39 33 25 20 19 8

丸吉皆川家日記 明治二年

凡例

一、この史料集は、磐井郡藤沢町（現岩手県一関市藤沢町）の商家・丸吉皆川まるぎ家の代々の当主が記した、天明四年（一七八四）頃より明治五年（一八七二）までの日誌のうち、六代目当主・皆川喜平治が記した、明治二年（一八六九）一月から十二月の部分を翻刻したものに基づいている。

一、史料集には、現所蔵者の皆川龍一氏の了承の上で、当時の政治・社会・文化および環境などについて調査研究する上での参考となる記事を収録した。

一、漢字は原則として常用漢字を用いた。ただし、人名や地名など、原史料の標記通りとした部分もある。

一、助詞として用いられている「与（と）」、「者（は）」、「江（え・へ）」、「而（て）」、「二而（にて）」、「而已（のみ）」および「并（ならび）」は、原史料の表記のまま、活字を小さくした。

- 一、「ハ、（はば）」「ツ、（ずつ）」については原表記通りとした。
- 一、「メ」については、銭の単位や重さを示す場合には「貫」に改めた。
- 一、「ㇿ（より）」「ㇿ（こと）」などの合字については原則として現行の仮名に改めた。

一、本文には編著者が適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

一、原史料中の欠字は一文字あけ、平出・台頭は原則として原史料の表記に従った。

一、史料の文中、文意の内容や人名・地名の比定などに関わる部分には、適宜その右側に（ ）内で傍注を記した。

一、文意の通じない部分などには、その右側に（ママ）を付した。また難読や疑問が残る文字・表現については右側に「（カ）」とした。

一、原史料の破損により判読出来ない文字は、字数に応じて□□で示し、字数の不明な部分については「」で示した。

一、原本で文章の抹消がある場合、抹消部分が読み取れる場合は、原則として抹消線の下に文字を示した。また、追記については原則として本文に挿入しているが、判別が困難な部分は原表記に従った場合もある。

一、史料中、現在の人権意識から見て不適当な語句が使用されている場合があるが、事実に基づく客観的な研究を進める史料として、そのまま掲載した。利用者にはその趣旨を理解されたい。

一、今回の「丸吉皆川家日誌」の翻刻は、青葉山古文書の会により行った。

佐藤大介 鵜飼幸子 熊谷新一 志田清一 後藤三夫（順不同）

一、全体の構成・編集は、佐藤大介による。

去秋改「
慶応四年巳正月元日靜成日也

明治貳年と成

門松無之、年礼廻り不申、只内々の錢り、備糲者常之通用給候事也、

一円雪無之と申程ニ、ちらく雪のミ、何分暖氣、二月末之如くなり、二日、三日風寒、日和、四日・五日上日和ニ而暖氣、南風ニ而、暮方雨ニなり、晴、六日日和、風在、何分二月氣候、珍敷正月なり、古とハ大違、

未立払ニ不成御滞留御越年ニ成而困ると申候

一此節ハ、御城下も大政官之御役々一字登り払ニ不相成候得共、何とも無之、官軍残り大凡千人計りも、そちらこちらニ居候、

御城下・在々共ニ金銀不足、至而不用、錢多ニ候得共下直成、錢ニ而御城間屋払之店々、別而迷惑致候、何之世ニケ様節可在や、御城下・在々共ニ、世ノ中悪く、尚又奥方者押詰より一揆所々ニ起り、騒動故ニ、金銀不通也、

此間六日、七日、八日日和、大ニ暖氣、二月末ノ如クニ候所、九日より風替り、夜より寒し、十日明方より雪と成、今日風雪あらし、夜より若返り、寒氣ニ成、十日相忘之雪、

一 北方一揆騒動ニ付、三日御代官様、四日ニ御郡奉行様御目附様等八十人程御下着被遊、御見分ニ相成由、何様御小人目附三拾人程奥方へ被相廻候由、當時御吟味中与成、御上様ニ而も公辺江者御都合不宜事ニ相聞へ候、屋形様之御為不宜申候、

大政官人御滞留、諸事を指行被成候由、

一年始礼之事、外ヲ見合候所、そろ／＼出懸候、千厩容子承候所、此度御下リ之御役々様御内意ニも候哉、罷越候分ハ礼請致可然由、大肝入殿ニ而も例之通、十日御用役付中寄合も在之、序ニ而礼受ニ相成候由、昨日ハ永澤より参候間、今日者手前より序も在之、幸と礼者直々罷越候、乍併永澤大肝入方ハ、元日ニも不休、引通御用大取込也、当町村ニ而肝入検断役ニ相成者無之、此節向之皆川甚吉殿へ被仰付由也外ハ嫌われ、又ハイヤ、病氣相達引込候故へ如此、無類之世中也、

千厩之役付中、病氣相達、引込候、仍而新ニ本町今野屋儀助殿ハ肝入、小路之弥左衛門殿ハ両人、検断鶴屋秀三郎殿両町共ニ扱候由也、
当分当所ハ組頭藤兵衛殿ニ而、中持預り、
地肝入ハ、御役々様押而及川氏を御頼ニ成由也、

十日之雪、存之外厚く、寒氣在之、十一日晴ニハ相成候得共、寒氣也、

奥方御地頭様方者騒動ニ付、一ウ御在所へ御下向被仰付、当地ハ若旦那様先達御下着御滞留御在館也、

此節村々肝入役等好む者無之、先以当村も可申付人無之、大肝入殿も困る由也、

一此間者夜々小雪、寒氣若返り、晴曇り、十四日同様、正月模様ニハ相成、諸事ニ宜、

書付来ル 写

今般郷村高御渡左ニ

御名

今般郷村高帳御渡ニ相成、当御判「」

太政官□□「」有之候事、

十二月「」政官

御名

其藩旧領、別紙高帳之通、今般土屋相模守、戸田土佐守、大河内右京亮、土
岐集人正^(主)へ取締 被仰付候間、早々地所引渡可申御沙汰之事、

十二月

御名

陸前

二千三百五貫四百四十文 登米郡

三千七百七十三貫四百十六文 遠田郡

三千五百八十貫三百四十二文 志田郡

合九千六百五十九貫九十九文

常州土浦九万五千石

右者、此度土屋相模守へ取締役ニ被仰付候間、郷村高帳諸書物引渡可申候事、

十二月

陸前

高九千八百五十六貫百四十八文 栗原郡

宇津宮[㊦] 七万七千八百五十石

右者、此度戸田土佐守へ同断、

陸前

千九百三十五貫五百七十五文 桃生郡

七百六十二貫七百八十三文 牡鹿郡

千三百九十四貫九百五十弍文 本吉郡

合四千六百八十六貫百十文

上州高崎八万二千石

右者、此度大河内右京亮江同断

陸前

千五百三十八貫三百弍文

氣仙

三千弍百四十貫百六十六文

陸中江刺

合高四千七百七十八貫四百六十八文

右ハ、信州松代十萬石此度真田信濃守へ同斷、

陸中

壹萬九百三貫七百七十五文

岩井郡

六千九百八貫三十壹文

伊澤

合壹萬七千壹貫八百六文

上州沼田三萬五千石

右者、此度土岐集人正へ同斷、

二千百九十八貫三百五十九文

刈田郡

三千弍百貫三百廿四文

伊具郡

千七百七十五貫百八十九文 亘理

二千三百九十三貫貳百十六文 柴田

五百九十八貫九百十九文 宇田

合高一万百六十六貫七文

右者、此度南部彦太郎江、為領分下賜候間、鄉村諸書物引渡可申事、今廿六
日日比谷御門牧野金麻呂上屋敷、家作共此屋敷下賜之由、御書付太原少將殿
より御渡相成候事、

残高廿八万石次江出

十二月廿六日

右ハ実事ニ候ハ、是ニ而御国方御仕分極り候や、痛入候次第、下々迄残多也、
右正月十四日ニ来る写

一代表貫文之札、手本物到来、先々之金札より幅等大也、存之外りつは也、追々
(立派)

一統通用「」々下落候、

太政官より被相出候札

伊達家御跡式

屋形様□実子 亀三郎様江

高六千廿五貫百拾文

宮城郡

同五千四百廿八貫三百三十八文

名取郡

同三千七百廿四貫二百九十九文

黒川郡

同二千九百三十七貫九百壹文

賀美郡

同貳千百五十四貫百五十九文

玉造郡

合高二万二百六拾九貫八百七文

右之御割付書追々来ル、誠ニ無^(是非)是悲次第、歎ケ敷御事ニ候、仍而当御家中江

茂被仰渡、御註進ニ而、御家中一統御暇被下候被仰渡之由、皆離散ちりく

と成、俄ニ立退之所ニ迷惑、難義之事共也、

諸御家中、拔走浪人多シ、思ひく散乱する由、

御郡方江も御首尾合在、組抜中并ニ百姓前へ被下置居候御知行、昨十九日書上

候所、是又同様被召上候事也、御地頭様方御拝領地共々、御郡方へ調書被相

出候様との事と承候、

当村、手前ヲ始、本家宮三郎組抜ニ而大高也、

御知行高壹貫五百廿文 貳貫五百文内持高在

何レも同様、去年之頃頂キ候御知行忤者、狐ニ引れ候様也、所々御地頭様方、御給人様方、御同様可成、御領内一統上下大騒動也、近頃之内御拝領之御方々、請取渡ニ可相成候、本家宮三郎追々困窮ニ至、軍ニ而ハ金を遣、御知行計ニ而、右被召上候而ハ、何も無之、壹軒屋敷のミ、立統兼候由也、手前を始、親類共も皆困窮ニ相成、甚難義ニ及候、此我身も七十四才ニ成、六十三・四より弥病身ニ成、数年床中ニ隠居、無類之乱世ニ逢而、心痛のミ、長生誠ニ無用なり、生過候、

一一ノ関様ハ、三千石被召上、貳万七千石と承る、御本家様より大ニ宜、矢張御隠居被仰付、御家督様ハ矢張角田ノ石川様御三男ヲ御貰ひ被遊、御相統之由聞へ候、御舍弟様也、

南部様十三万石と言書付別ニ来ル、其外

但、盛岡ニ御兩人様在而、御領地無之、殿様在、仙台領被下候者、此御方か、不知候、

米沢上杉様七万石と成、半地ニ不足、庄内様ハ拾壹万石と在之、此御割合不分り也、追々承る、

御国替ニ成由也、南部様ハ廿万石ハ被召上、彦太郎様御家督ニ立、十三万石被下候由、

一明治貳年巳正月十八日、去当無之大雪也、凡一尺位か、昼中ニ而半分程残候、寒も若返り寒し、十九日晴、風、併上日和、昼より静也、廿日も日和ニ成、存之外雪不消、随分結構也、

一米 薄衣納米壹俵錢ニ而廿五貫文

廿四ニ而直し金拾切壹貫文也、

一大ツ九貫文ニ上ル 小麦ハ拾壹貫文と申候

セうゆ造り苦む

米穀共ニ上ル 肴類不足高直

其外高下多シ、追々如何、

過ル十八日朝、新沼村小長根屋敷喜太夫、此節ハ悴代ニ成、出火焼失致、不明方ニ而手不廻り大ニ焼痛む、廿二日夜、村ノ京ノ森屋敷、去年焼残ノ乗込馬屋

焼失、五ツ時半頃、此夜雨中也、明方より雪ニ成、追々此頃度々雪、

一肴類益々不足、高直之物ハ異国船共数艘来る、往來スル大船成ルニ仍而、通

る跡大堀ニ成而、小船ハ通り難シ、何分浪あらくと成、勿論肴を取者、漁
魚取られ候故、漁船遠く出ス者無之、浜近所之肴計り漁ス、仍而不足、高直、
浜陸共ニ迷惑致候事、

廿三日飯後より晴ニ成、此節市町一円不盛、在々村々も金銀無之、又店々ニ
ハ錢相庭追々下直、定ハ弍貫四百文ニ而も、弍貫五百六百文迄、仍而小間物
杯ハ売可申様無之、金直し、御城下払ニ困り、大ニ割合、損五割已上と成、
仍而仕入休、都而商ひ休、

一紙類大高直、料紙壺丸金七切位、ちり紙是又高直ニ而、鼻紙向痛々數、不用
ひ候、

一追々雪、夜々朝々時々ふり、薄雪なり、寒さ春寒強し、

一当時世上之咄色々在、此節松前江脱走士、海陸より入込、同所ニ徳川將軍家
之御備金圀五拾万両程有之所、官軍方蔵より一字出候荷ニ送り、駄送致さん
とする所を、徳川家并仙藩之脱走勢等數人打而懸り、尚又フランス異国人等

加勢ス、大ニ戦ひ、官軍敗レテ脱走方へ右金取られ候由と、脱走色々の組在、
夥敷人数在由也、

廿八日雪あれ、廿九日さらく小雪、風寒、晦日同様、寒氣甚敷寒中同様、
乍併春寒ニ而、地中より陽氣登り而、日中ハ緩ミ、

二月朔日朝寒氣日和去年之当日同之風併去年より少寒氣まし候か大也、

一かれい壺疋百八拾文位、赤魚貳百五十文、

一大ツ九貫五百文ニ成 一鱈不足高直、

一四日初午雪、嵐、寒、昼より晴

一五日より日かんニ成 六日社日、

.....
(この間、落丁あり)

脇道西之方へ被相送六人程被召登、と申候黄海者取押可申様無之、不知内ニ遠く西

海道為御登ニ成、御小人御足輕拾人、御人足三拾人ニ而嚴重也、外村々事ヲ

起し候者共、追々拔々御召捕ニ成、黄海ハ三人御牢入、余ハ御戻被下候、

御牢入、肝入泰助殿共々被入候

一三月朔日、二月中不天氣、風・嵐多、今日も雨、みぞれ、二日も同様、三日
晴而風、此間殊ニ寒く、小雪さら／＼度々也、

一肴赤魚貳百五拾文位、高シ、にんちん一午房大ニ高し、一把百八拾文より貳百文
右ニ準し肴類高直、何も不食候、

一新御制札、当町今三日ニ御懸方ニ成、東京

太政官ノ御書認と相見得候、

去年慶応四辰三月御書方と相見へ候、

諸国一統江被相渡候物之由、札数五枚、

一松前ニ而、脱走組取集候金高、大凡貳百八拾万両程集置候由、夥敷事也、追々
事ヲ起さん心懸可成也風唱ス、

一御城下御手前様御家中、三貫メ以下田畑ヲ為作、百姓之行ニ致様被仰渡候由、大身御大家者、朝廷京方之武士ニ被仰付候由、此節御城下町裏辺御宮町近辺荒地買求め、小身之士ひ達并はしくの町人共ニ土地ヲ求而、専ら耕作之心懸ニ成、屋形様御下向何時と言事不知候由、

一国分町江^売商女御免ニ成、宿屋中大盛繁昌、夫故塩釜女共引上られ、同所ハ至而不盛と成、衰微之姿ニ成、

一江^法中者此節御城下ハ、武道劍術等一円ニ不学、稽古スル人無之、専ら御士ひ方も、家内中賃仕事、錢取方専らなり、御知行株數無之、如^カ余人の、

仙台金三・四百文位之含ニ成、外国ニ而も新金出ス由也、米相庭も引上候 新金入込ニ而、諸品弥引上、

一当町も米追々引上ル

一玄米五升より五合位 一糯米四升ニ成、

一とふふ・こんにやく三拾式文ツ、同直

一大ツ拾貫文 一糸綿五十五目

御城下六十目也

一塩不足、御払無之候、

金貳切ツ、御渡りも未無之、

✂

此頃ハ引続日替り之御天氣、雨晴而風ニ成、寒暖不同多く寒し、未夕雪の氣不去、
昨年同様、

一塩、内証物五貫五百文、金貳歩七百文

三月十七日昨日より日和、静也、尤暖和、種の蒔方専ら也、然ニ当種ハもへか
たし、仍而皆見合、十八日夜大ニ寒く、水も氷り候、十九日日和、風、此間廿
日ハ館山度々野火ニ而騒しく候、廿一日日和、風在、

一四・五日前、氣仙沼へ脱走組五・六百人程来り、同所ヲ本陣ニ而官軍と合戦致
候由、先ニ注進在之ニ付、大ニ騒キ候由之所、小泉沖へ官軍船拾艘程参候
得共、着岸不致、引戻り、歸り候由ニ而、軍も騒キモ止、外当分別条無之候、
右官軍半高程仙府へ揚候由、

一当節新式歩金并一步金共ニ、其外大政官ニ而被相出候代壺貫札、式貫文札等至而容子不宜、皆六分位之代位付ニ而、人々きらい申候、依之仙表ハ店々表戸ヲさし、取引休ニ相成候、御他領福島辺も同様、店々商売休と申候、最早此辺も右様可相成候、世上一統之痛ニ可成シ、

一手前坏者、去々年より此三ヶ年生糸方損金ニ成、殊ニ去年秋、御城下鎌田屋入仲間、糸隠し売被致、右難渋ニ被及、去冬より欠合、此節未不分、式百七八拾両之金高也、平治事正月末より仙江登居、下り不申候、弥々手前難渋ニ至候、

一三月廿五日、此間二日程暖氣、昨今ハ至而寒し、

一当所組抜中へ、御代官様より御首尾合、御手前共此度百姓ニ被成下候間、其心得可有之候、此段申遣候、以上、と言被仰渡也、是又痛入候次第、元来ハ勿論、軍ニ付而ハ格別之金ヲ遣ひ、其上斯之仕合、後世組抜者誠ニ無用之立身と申、如夢也、近年進而士ひニ献金而願出、士ニ成、則軍ニ被召遣、打死ニ而、其上御知行等被相欠候仁も在、金子ハ献上致、御書付頂キ候計ニ而、

未御知行不被渡下、其内ニ御上ニ而国ヲ被召上、天領と成而、御知行不被下人も在之、痛入たる事共在之候、

三月廿五日日和、此間天氣不同、廿六日・七日迄雨、廿八日上天氣、保呂羽山御祭、近年無之大盛り之由、茶屋ものさつはりと売払、菓子杯も同シ、肴類浜方より存之外余分来り、三拾太已上之荷売払ニ成由、夥敷諸商ひ在之候、同日序ニ竹駒宮御神樂杯在而、是又大盛り、

一御国御領地弥々御渡ニ相成由、松平大和様江御渡と申候、一昨日千厩ニ而、御向役人様方御引合、当村杯ハ明廿九日御渡之由、御首尾合在、右御方岩井郡上下、伊沢三郡と申候、当御地頭様方ニ而も御所者同し筋、惣御家中へハ、皆御暇被下、若所存在之者ハ御城下へ登、御主人様助上候様御セ話御奉公可仕由也、皆々ちりくと成、痛敷事也、百姓ニ可成と在之倍臣、一統品替り百姓之御取扱也と被仰渡由也、仍而諸方田畑ヲ好而求る之手配、南方ハ荒地等被下由也、郡村江相渡ニ付、海道近辺ハ通用難成也、

一御国札被相止不通ニ成ニ仍而、此間大ニ騒ク、請取人無之候、御城下太物間

屋方相廻り、五割引キニ而、此度計り請取、跡ハ止、

晦日迄ニ者、所御請取之御役人、御双方御廻村可相成と存候所、如何ニ哉、御延引ニ成、

一屋形様より公義へ被相達候ニハ、御知行高廿八万石ニ而ハ、家中ヲ撫助可仕様無御座候間、御家中共々之事ニ、一字領分差上候様可仕奉存候也と被仰上候由之事、相咄候耽与不分、此間之儀色々様々噂在、此御返事未無之由、

四月朔日、昨日より南雨風ニ而暖氣、朝より小雨ふり、二日・三日大ニ寒風、四日同、大風、五日朝大霜下り而甚寒し、若もい桑等者大ニ当り焼、此霜厚候而、諸品江当る、百五日者来ル八日なり、今六日少シ暖和也、

郡村御請取渡ニ相成候由ニ而、百姓前銘々持高調書上、是ハ荒地川欠地損等有之分、書出可申上候由、此度不申上候而者、銘々之損ニ可相成、為御恵之被仰渡、一兩日村方一統書上、俄ニ闇敷候、併末々御向役之御方々御廻村無之、当御家中前其儘住居ス、天領ニ相成候而ハ、御支配御役人之而已、御家中ニ人々不参候間、家中屋敷ハ不入候、仍而何方之御家中も不引取、御構無之住居可

致との事也と申候、百姓ニ成度者ハ、直ニ百姓と可相成との義ニ而、又輕者も、御手前ニ御扶持人ニ成度者、登仙可致之義ニ而、夫々願出候仁在之候、

一御城下錢相庭上り、式貫文位之含、未表立不申候、先日中札不通用之容子ニ付、取引大ニ騒候由之所、御小人目附被相廻、四・五人も縄ニ成ニ仍而止、今ニ札取引致候由、

右国札之事、大政官江御欠合ニ相成、是迄之通通用ニ成、但上納金ハ、大政官ノ方ハ正金銀ニ而被相納候訳ニ成、仍而御城下ハ、金銀札錢共ニ同シ割合ニ而通用、

併 屋形様ニハ、江戸御上府、其外若殿様御一統龜岡御殿江御引込被遊有レとも、如無と被為成候間、下々自然薄く相成候、札も追々其通可薄相成候、一右ニ付、御郡々々受取渡之御用意也、御境目く者、此節御番所無之、明通諸通用ニ成、商ひ荷物自由ニ駄送、御城下も、御改所も、糸方も、三品間屋も、一字被相上、無御構と成、仍而御郡々々之商人ハ、天領と成、追々宜方と成、当分無御役金、当時官軍多く来る、御城下宿屋滞留、国分町より二日町、北カジ町迄、旅籠屋ニ成、大るニ盛り申候、

一米白^{ニ而}六升壹歩

此辺ハ玄米^{ニ而}六升より五五

道中筋六升五合位^{ニ上る}

一此辺^{ニ而}も油高直、五盃壹歩位、粕油仕出し六盃壹歩位、餅きへ安く不宜候、上盃盃五百文、

一此辺月代髪六拾文、湯せん廿文、

御城下ハ八拾文、廿四文、去年中より如此、

一茶者、近年手製流行^{ニ而}、店不売、此節町方^{ニ而}下り茶仕入無之、茶売方休ミ候、下り物高直^{ニ而}不宜、地ノ方宜相出シ候、

一此間風日和続^而、麦干入候由、然^ニ七日雷鳴在、雨少々、潤ひ不足、直様晴^{ニ成}、

八日上日和、藤勢寺薬師様祭宜、諸人雨を願居候、今日百五日也、霜ハ不下候、柔和之日和^{ニ而}、少風在^而霜無之候、四月之中^{ニ成}、過ル五日大霜、夫計り、跡ハ無之候、雨不足、風多く、仍麦之類者照込、干入、去年より不宜と申候、十一日より大^ニ暖氣進、十二日尚宜日和、

一米者何方も上る、当所五升^ニ成、

一小ツ小壺升四百文と申候、

魚類不漁^ニ而弥々高く、此辺ハ肴なし、

喰物・着物、何品共^ニ高直^ニ而、誠^ニ難立続候、

錢、近頃不足^ニ成、御城下ハ式貫見詰と申候、

御上之事も色々之噂在、併不定か成、御支配之御請取御渡候方御延引也、

一日本國中御改正、諸国諸御大名様方御領国 朝廷江被召上、西国方者京都詰、

東国方者東京と申^{元江詰}戸也詰、諸御用京都より被仰付、御仕法替^ニ成、古頼朝公

已然之御仕法、今般御政事方御銘ハ、群^郡・県事と言御令也と申候、

御郡方御代官役者、知県事と言、大國大身之御方も、皆小身と成、官位^者在

此度御郡受取被相下候御役

之候得共、小祿と成公家様同様^ニ成候由、仙台様^ニ不限、御一統御家々之

家中、大身之方々、是ハ皆京都之朝臣と成^而、国々自国ヲ守り納候様被仰付、

又々御用被仰、当屋形様^ニハ、六万石^ニ而京都詰を被仰付、若殿様并龜三郎

様^ニハ東京へ被仰付由、当御国御在所者、龜ヶ岡御殿^ニ、御女中様方同御殿

^ニ被為人、当分御在国也、世の中一変此事也、

一 此度京より久我^{脱走為御征伐}大納言様御下向、仙表之御城江御入被遊候由、然ニ涌谷之伊

達安芸様、脱走共征伐被仰付、御家中より五拾人壹組ニ而、三組被相出候由、然ニ又涌谷御家中半分程脱走致候由、大納言様船ニ而御下向被遊候船ヲ盜取、其船ニ而出帆致候由ニ相咄候、

一 奥州今般国分名改、奥州ハ五ツニ分ル、出羽

五ヶ国と成、出羽ハ二ヶ国と成、名改

一 古金段々出ル分、御吟味之上、直段付被相出候事、此節ハ仙札も、六百文之悉ニ者候得共、四百文之含ヲ以、内々此割通用、新式歩金不通用、此ニ品配、諸物不下高直、

一 一ノ関様も上京被仰付由也、御家中御供五拾人と申候、

一 国御請取渡、御郡会所御陣屋者、前沢江被相立候由、岩井郡上下、伊沢郡兩郡ニ而、高拾六万四拾八石余、是陸中内也、一級と成而四月十四日御請取方御役人、知具事と被仰候御方、未タ御着無之候、御延引也、

右ニ仍而、諸御役金代と申事無之、商人諸品仕入方も、何方ニ而も勝手次第と成、

此節より御番所・御陣所と申所無之、自由ニ相成、此度京より被仰、百姓国々共ニ近頃指痛候ニ付、御救ひ被成下候御吟味ニ而、御年貢共ニ三ヶ年より五ヶ年ハ半高御免被成下候由之事、誠ニ以難在御事なり、天領と成、追々共ニ宜敷幕方可相成候哉と、人々悦び咄合候也、

十五日も上日和、過ル十三日、為五穀成就之、御郡々々江一統精進被仰付、休日、諸神社江参詣ス、同日保呂羽山ニ而御祈祷御神楽在、十六・十七日、当月引統照込ニ而、田畑仕付水不足ニ而困り居候、夏日照之容子也と、皆相咄候、

一此間脱走為征伐之、拾人程千厩江参り、所々ニ居候脱走之人々被召捕候、依之千厩も騒ケ敷候、

十八日庚申、日和、日照込、此節蚕一起位也、今年之蚕ハ大ニ進ミ、正取候由、桑も当分不高売買致候、手前杯ハ、平治春中より難渋、欠合長々滞留、未ニ不帰、近年之損金押畳候大難渋と相成、家内混雜ニ而、蚕も置不申候、甚氣之毒致候、此節之難渋当り前ニハ可有也哉、手前計案外当惑之事ニ候、取引行ひ振不宜故、

如此床中ニ居候、老イ甚困候、如斯ニ相成候時節ニ出合候とハ思ひも不寄、七十四迄、誠乱世之長命、用ニも不立、無用、不好事也、

一当二月中被召登候黄海村之強訴之者共五人、并摺沢村之金札拵十吉とか申者、共々御牢内ニ而疫病ニ而死シ候由、御首尾合相下り候之事、病死ニ而ハ却而宜と申候、

(甲子カ)
キノいね雨

〔廿二日少シノ雨ふり、廿三日雷神天之精進、廿三日夜大雨ニ而、田畑潤ス、併数日照込ニ而、干透だる田ハ一円水不溜、しろ田ニ不相成、去年も田植前此節同様、存之外暑サ進候、

一国郡御請取御渡方、御役人様未御下り無之、御延引、

廿四日朝分ハ曇り、晴ニ成、此節刈敷かり最中ニ成、大雨を待、今日キノイ寅ナリ、

一新ニ御掛替相成候御制札、已前之御法度条々書と者大ニ違候事、猶又駅場方御掟之事、品々数々在、検断殿方へ一札被相渡置候也、

廿八日、昨夜も相応之雨、今日四ツ頃より風、九ツ時分晴れ、廿九日曇り、朝大ニ寒し、此頃者夜々之雨ニ而、干損田も追々代ろかき、田植朔日より、手前ハ二日之日取、苗相応生長ス、

一今年ハ蚕の年と人々申候、何方も当分宜、桑存之外下直、百目由文より八拾文・六拾文位売、

一濁酒壺盃百廿文ニ上ル 一大ツ拾壺貫文

らうそく百文也

一水油壺盃八百文 一手拭六百文より七百文迄

一とふふ廿八文、小也 一千かて小一升弐百四五十文

一米ハ五升

一ノ関様ハ、御買米為御登御払、幸ひ高直、此元六升御買ニ而、兩ニ

七八升御売、凡三万両御利潤ニ被相成候よし也、御仕合宜、

ノ

一初田植、曆表昨廿九日、当町式軒植田植、同夜相応之雨、此間度々夜々之雨
ニ而、干損田仕付、手前も植初いたし候、

五月朔日朝分曇り、水沢山ニ成、桑高直ニ成、百目百文より当時三起位、御領
内御渡し方未タ此辺御渡し不成、色々様々之悦(説)在之候、南御郡ハ所々御渡し相
成候由申候、

一錢相庭之義、追々不足ニ成、何方共ニ上ル、依而当町も同様ニ不致候而ハ、他
方ニ相当不成、当所式貫文之取引ニ成、

一田植日用代、老入分五百文ツ、高直也、

近頃ハ毎夜雨、一日置位、晴度々之雨ニ而、水十分、若め無之候(若布)浜方ニ而か
てニ用ル、高直也、

五日節句、晴而日和宜、田植□中也、最早仕舞ニ成、又昼より風替、雨ニ成、
六日も雨、

一桑追々高直、尤蚕沢山置^ニ而、此節田植桑不出之折也、金壹歩^ニ壹貫五六百目位、目買^ニ而貳貫目^ニ当ル、追々如何、

蚕ハ、当節舟子^ニ及候、当時宜年也と申候、

一当郡北方大原近村ハ、岩城^(安藤)安遠対馬様御領分^ニ被仰渡候由、当村并黄海、千厩、此近辺天領之訳^ニ候哉と噂在、未曉与之御首尾無之由、物々不推付振合居、不宜候、

七日、此間ハ毎日之様折々雨、桑者弥高直、今朝ハ貳貫貳百目位直段、

一御城下便有、当時金銀至而不通用、壹貫文札貳百五拾文位^ニ成、貳貫文札ハ五百文、貳歩金者一円通用無之候、代相庭之義、貳貫文之割^ニ而不足、追々上り可申哉、

一伊達辺、桑七分通八□□燒^ニ相成、蚕者種まよへ致候様^ニ申候、角田・丸森辺、桑五・六分通燒、金ヶ瀬より越河辺三・四分通ハ、蚕ハ当分宜様不申候由也、

十一日晴、朝些々冷氣勝、此貳・三日晴曇り天氣不定、存之外暑と不進、併蚕者何方も宜由也、

此間桑追々多く出、下直也、今朝者中ニもあし、式・三四貫目壺歩位より五貫目と成、六貫目壺歩位ニ成、当年ハ蚕併大当り、利分ニ可成容子也、然ニ奥・北方ハ未タ田植最中成と申、諸普請ニ而仕事後レ成と言、

十二日晴、曇り、雨氣、今朝桑些引上り、此節蚕庭子ニ至り、最中と成、夏至今日ハ中ノ日、十三日朝猶又晴、朝より高直、叭壺ツ三貫メ位前後、今日より十方くれニ入、何分当月者雨多し、不天氣ニ而冷氣也、晴、曇り、十四日日和冷氣、十五日早朝晴而又曇り、今朝桑壺俵式貫文前後下直也、金壺歩ニ六貫目位ニ見得候、当年者物之割合ニくらへ下直也、

一昨日御代官様并御横目様、大肝入殿、当所御出村、御郡村々御引渡方為御調之、御廻村御出、御地頭様御居館、御役々様方御立合後、引受被成置候上ニ而、御調書を以御支配御役方へ御引渡被成候由、当方御代官様方ハ、扱切御給所一字御調之上、御渡被成置候由、当村并隣村六ヶ村半、釘子村ハ半割、当御扱ニ成由也、此村々ハ天領と成、松平大和守様御支配御郡と成由、千厩村より近村、北方ハ岩城平ノ安藤対馬様御領地と成由、其外御鉄山、銅屋、御

塩場等も、先日夫々御渡之調ニ相成候由也、徳田村より右続五・六ヶ村者、如元之一ノ関様御領地と成、

右之通当御郡も弥御引渡之事ニ相成、誠以伊達家三百年来之御大家、百万石之御領地、此度被召上、屋形様御始、上皆様、何様被為成候御事歟、既ニ御禿ニ被為成候次第、誠ニ御痛敷有様、無申計、下々迄歎ケ敷事ニ奉存候、
一今十五日、雷神様江氣候直り、五穀成就之奉願上候事、一統精進致候事也、
十方暮中ニ候得共、十七日迄日和、併冷氣也、

一屋形様ニも、御慎者御免ニ被成せ、東京柴御屋敷御拝領ニ被為成候由、少ク御怡之方と申候、外色々様々之事、大ニ噂サ在之、書難尽、追々可訳候、
御城下大店衆中、表店戸をメ、無異儀分内取引、御領内御割合之通、御渡之都合ニ被成置候得とも、未タ御向之御役々様方御出張御下り無之候、

一当十八日雨天ニ成、桑も格別不下、五貫目壹歩位、千厩之方ハ桑大ニ下直之由、
一異国人より願、京都へ徳川將軍家江御用立金八百万両程御座候処、朝廷より被為禿、右金返金請取可申様無御座候間、將軍家之事ニ御座候間、朝廷より

御弁金被下被相濟候様被成下度奉願候処、御座候、若又右金御返濟難為成候ハ、徳川家如元之將軍ニ立被下候様御吟味被成下度、右両条ニ而、何之義、早速御答之義奉願上候と申上候由也、

一 十方暮中ハ、五日日和たへ、夫より不天氣続、廿二日迄ニ而十方暮ハ極り、今廿三日も曇り、此間ハ東風強く、至而寒し、毎日半日ツ、雨ふり不止、

一 桑も蚕最中ニ候得共、存之外不高、中吟壺俵貳貫文より三貫位迄、然ル冷氣ニ而、蚕不食、桑人用少シ、直段昨今弥下直、壺貫四・五百より下り、壺貳百文位、庭子九日・十日ニ而漸々引シ方ニ相成、尺々數無之候、廿三日也
一米者此間上り、四升五合位醬油壺盃貳百文

一 濁酒壺盃百廿文

水油壺盃八百文 蠟燭壺丁百文也

一 雜穀類同様、下落之物無之上る、

新麦作ハ、生元ニ而不足ニ候得共、度々之雨、冷氣ニ付、実入ハ宜由申候、一 鮪漁も相応ニ取れ候得共、駄賃其外入料多ニ而、市々江引着、不安候、

右之通^ニ而、凶年同様、粮類不足、山草春中より集置、専ら用^而米之助とす、
町方ハ専らかゆを用る、数年引続^而米雜穀共^ニ高直^ニ而、買喰^之者并凡家、甚
以難義、間^ニ合候家ハ少し、在方ハ存之外錢取在^之、宜、惣し^而吉凶共^ニ諸
振舞無異儀、手廻^リ之者計^リニ呼集、諸品減少ス、

五月小也、無晦日
廿八日日和、六月之節^ニ成、今日薄暑宜、乍去昼過七ツ時頃より又冷氣、廿九
日昨日よりハ冷しく候、

此間桑直段も上り、沓俵三貫已上^ニ成而、進^而三貫八百文、在方共^ニ式・三日
日和^ニ付、蚕之勢直り、桑入用、買^う進^而、高直^ニ成、又桑出高多、仍三貫文
位也、

六月朔日朝より冷氣^ニ而曇り、今日ハ大切之日也、然^ニ何分冷氣也、存之外氣
候不宜、東風之氣不止、冷氣勝^ニ而、人皆少ク心支致居候、蚕ハ先立引上候、

組拔一統御暇、百姓^ニ相成候様被仰渡候所、何卒如元之御奉公人仕度由、御

知行無御座候^而も宜^ニ訳^ニ願出候得共、未御下知無之、仍^而在郷江引込候由也、
右之次第^{ニ而}御上同様、国家之乱時節到来^{ニ而}歟、本家も手前も難^ニ決相成、

一六月五日、此月^ニ相成、毎日曇り勝、東風不止、朝暮共^ニ寒く、何分冷氣勝^{ニ而}、暑薄く、扱々不常、氣候不宜候、稲引立兼候模様、何分不安年^ニ相成候、土用八十二日^ニ相見得候、夏之むしハ、蚊、はいがら、蟬^ミ等一円未夕出不申候、

一松前ハ、拔脱走人数大勢^{ニ而}官軍方と合戦之由、五月十二日同所之御城敗破れ、官軍方敗軍と成、城を取られ候由、依之仙府官軍方へ加勢^援を申来候所、人数無之故^ニ、東京江早打登り候由、松前より来ル者咄^ニ、脱走人数、尤大軍、鋒先強く、難当り由也、脱走方ハ徳川家并仙台様ヲ再興引立んと申由也、金銀兵粮等大^ニ賄ひ、異国人江合躰致居候由と申候、追々如何、然時ハ、近頃^{ニ者}軍事不可止也、津軽江押移り、同所^{ニ而}合戦之由、

一先日、佐沼拾八軒程焼失、

六月八日曇り、小雨ふり、九日昨夜より今日も相応之雨ふる、連日之不天氣、冷氣ニ而快晴成兼、誠ニ不氣候也、土用者近く、至而暑薄シ、

一桑直段、未蚕相応ニ在之、蚕違不足宜此間中矢張忒三貫文位より貳貫四五百文高下在

之候、併まゆ者出来不宜候由也、十一日朝、蚕あら／＼引揚、桑買人不足ニ而、四・五百文より追々大下落、百三拾文位迄、十二日朝迄出テ売れ候、矢張右同様下直、在々遅キ蚕、所々損し、依而備置候桑追々相出、下直ニ成、土用ニ相成、蚕も上り切、

一まゆも一体ニ者出来不宜、薄皮也、直段大忒升ニ而金五切、六切位ニ取引、種まゆニ相成候まゆ、尋テ買入、金拾切位之由、貳兩位か、伊達辺不足故之事と申候、

十二日土用、暁八ツ時八分ニ入、八專之初、今日朝より雨ふり、冷氣也、十日之初ふしハ天氣宜、

此朔日并土用入日共ニ不天氣ニ而、甚以不宜候、連々と引続不天氣ニ而、諸作物引立兼、不宜候、大麦実入者吉と申候得共、昨年之様長雨ニ而ハ、又痛ミ可申、

誠以年々不氣候ニ而、取統大難義、

一仙府表者、先達より錢壹貫六百文相庭取引被仰渡、通用之由、札も前之通四枚壹歩通用、

米直段五升五合也 濁酒壹盃百廿文上也と申候、

一此節浜方者、鰹の大漁、下直、併此地江ハ駄賃・諸入料ニ而不安、六百文位、同ふしも、大ノ品六百文より五百文位、

十七日八專、^{十二日}初より毎日之雨、十五日曆ハ大暑ニ成、八專中ニ而雨勝、今十七日晴ニ成而風吹、仍而暑氣ニ不成、冷氣也、十五日夜月蝕五ツ時五分余、

一氣候不宜、不作ニ可成容子候得共、地勢ハ吉、稲も存之外吉、去年より引合宜候由也、一体去年より曆表ニ而十二日程後レ、去年ハ朔日土用、当年ハ十二日土用ニ而、未夕節之日数在之、少頼む所在之と申候、何分日和無之故、麦打、其外畑之仕事可致様無之、困リ候、八專過ニも相成候ハ、日和続可申歟、難計候、上川ニ而大麦者壹俵五・六貫文直段と申候、不高候、

一 蚕未夕惣而揚り不究候由也、まゆ直段者 壱升、代拾貫文より式拾貫文迄、大違、大不同也、

土用中ニ而も蚕在之也、去年種ニも夏子多く在之、種切まゆ、専ら上式拾貫文迄買入、糸仕出し方ハ素揚ニ而三百兩位見詰、取賃、入料懸候而ハ、四百兩売ニ見候而ハ、利潤ニ不成故、買人も見合之容子、追々如何、大方手取糸ニ成、まゆ上作ニ取候分大当り、利ニ成、百升已上取候者有之、まゆ売ニ而金百兩之利ニ成、

一 十九日より雨晴、曇り、廿二日迄三・四日日和ニ而、稲の模様大ニ宜、引立ニ成、暑も相応、併夏の虫不足、不出もの、蟬ミの類声不聞、蚊者不足ニ而、かや不用家家多し 廿三日雨ニ成、過ル廿日郡中天氣祭、精進ニ成、

一 佐沼高市(互市)も日延ニ而、十七日より、併不盛、御城下・遠方商人不参候、錢相式貫壱歩、仙札下落、半直ニ成、大政官之札三十万兩程参ル由也、佐沼ニハ芝居も立、相応之仕懸、宜と申候、

一 米相六升位、若柳同様、是ハ東方江多く脱け、高市前毎日百駄位ツ、出ル、

仍而南方引上、高直、

昨夕より

一廿三日雨天 米者、先日より四升五合四升迄上る、

大ツ壺斗式貫四百文、高直なり、

一油壺盃木宙文 右高直ニ付、家々夕飯不日暮、家過し、早く寝る、
先日より七百八拾文

さ、け初物壺升百三拾式文

一仙府御家中、千石以上江ハ、五拾石ツ、御家柄ニ而五十五表也被下候由、
御一門
万石已上者百表ツ、組抜中ハ御奉公願上候得共、不成、御先代様御取立拾七
人計り御召仕ひニ成、倍臣御家中ハ御郡支配ニ者不成、同御家老支配ニ而、百
姓並、元之御知行地御年貢上納地ニ成、身通ハ町人並、羽織袴・脇差計り、組
抜も同様品替り百姓也、御上ニ而未諸事御預リニ而、下々別段替る義無之、矢
張仙台御領の如シ、御引渡無之内、御役々も是迄之通也、併諸事御手入無御構、
穀物并諸駄送大ニ通用宜、前々写、御扶持方ハ御家柄ニ而被下候、着座之御方

へ者廿五俵也、當時至_而之小石なり、

一廿四日安藤対馬守様御家老・御目附・御郡奉行・御代官御役々様方、千厩江
御下着、諸方御改、御受取之御都合と相聞得候、同所ハ安藤様御領所ニ成由、
御会所ハ御陣屋ニ可成歟、御役々様方ハ飯ハ御宿也、

廿五日昨日より雨、晴、日和、併冷氣、廿六日手前并外麦打多、今日ハ日和半晴、
廿七日曇り、廿八日同曇り、何分東風不止、甚敷冷氣ニ而、夏のむしのミ計り、
せみ杯ハ一向不聞、蚊も不足ニ而、蚊帳不用家多シ、

麦作取納、不作ニ而七分通り、

保呂羽山祭も至_而不盛、尤物高直ニ而、茶屋菓子仕込物残り、早仕舞、吸物
四拾文位、宜物五拾文、

廿九日虫追休日、早飯後より雨ニ成、

一金銀善惡在、仙府式歩金不通用ニ成、札も下直ニ成、大錢計り多シ、皆小錢

の如く通用、小不足、通用無_ニも、大何文と唱へ、大_ニ違、仍_而自然高直_ニ成、
一連日之雨天、不氣候_{ニ而}、尤今廿九日節替、七月之節成、土用中は暑氣無_之、
仍_而ハ当年も不作と可成、五・六分之作_ニも相成候ハ、せめて人死も格別
之死人も不出様可相成歟、甚以不安年と相成、扱々年々之不作、続兼候、
一伊達生糸、新十五日より兩所之直段下直、兩_ニ四十目位より五十目位迄と申
候、追々如何、

一晦日晴、曇り、麦打日用五百文以上、高直なり、天氣次第麦打、

女共与同シ

一氣仙沼_{ニ而}、から麦種小壹升五百文也と申候、甚以余り高直なり、米ハ弍升
七合半_ニ当ルと申候、

一大政官より被相出候金札弍万兩分、御鉄方并御塩方江被相渡分、氣仙沼へ下
着分相渡候由、当方へ右札参り、見候所、壹歩札・壹朱札、仙台札の半分位
ニ而_(小サシ)少サシ、

仙府_{ニ而}去年御吹出之金弍歩金等、夏中_ニ成、一円不通_ニ成、持居候者、大小
共大_ニ痛候、

七月朔日、今朝日蝕、雨暁方より昼中迄ふり、はれく日和、今ニ不定、麦打大ニ困り候、此間五日夜より大ニ暑く、六日大暑、日和、四日程続候故、稻并諸作大るニ能直り、六日夜より七日朝雨ふり、五日頃より晴曇り、日和ニ不成、最初出穂之模様、南ノ方中奥辺出穂ニ成由、此辺先日中ハ弥不作と騒キ候、

米直段上り、三升壹歩、売人無之候、壹升六百文也、
から芋壹升貳百五拾文と申候、余り高直、

千厩へ
六月廿四日 御着安藤対馬守様藩中写

一参政 漆原右源太様 一大監察 小山 泰

一県宰 市原五兵衛 一主計 波多野十兵衛

一県吏 佐川与五右衛門 一小県察 青木武介

一筆生 遠藤八右衛門 一計吏 岩佐祐右衛門

外下々拾六人合廿五人 岩井郡三拾ヶ村也

東山御領分三万四千三百五拾三石九斗六升八合 東山ニ而

天料^(領)之方松平大和守様御支配、御役付左ニ

御家老

一権知県事 久永真里 一権判県事 朝岡剛平

一調役 渡邊五郎兵衛 兒玉嘉助 富田八十右衛門
宮嶋謹一郎

一書役兼 長野策平 谷臺助 戸塚起治

一捕亡 略ス

御料地 伊沢・岩井郡之内、九万七千六百壺石三斗六升弍合

一当夏氣候、去年同様、去年より十日程後レ、日和当分同様也、此間中晴曇り
一日替、何分不天氣ニ而、快晴不成候所ニ、七月十三日市、朝曇り、暑サハ
相応、然ニ雨ニ成、七ツ頃より雨風強く、嵐ニ成、夜大嵐、市ハ早々仕舞、
稻ハ南御郡者出穂盛、当地近辺ハそろ／＼出穂、定而痛ニ可相成与咄居候、所々
大破在之候、

一諸直段、米ハ弥売人無之、白米壺升七百文ニ而売、

右ハ、南方笠売七人手前へ泊り、白米ニ而買入持参ニ付、如此、

一なす・木瓜、壺ツ大錢ニ而拾貳三文、

一はす葉、大センニ而一詰五・六文より八文位、拾文迄、不足上ル、

八百屋ものの右ニ準し高直、無類之不氣候ニ而、出產不足也、

一竹子ハ、土用過ニ出、当月初ハ盛也、盆中用る、

一肴ニハ、鰹・鮪・鮭等、此節如春出、油至而輕し、

一セン香不足、小壺把小壳大センニ而八文前後、

一若松丁ちん、壺ツ大セン七文、小蠟入拾文位、

一絵丸丁ちん、壺ツ大セン廿文前後、皆大セン通用、表ニ成、

一醬油、壺盃上貳百文、中品百八拾文、小センニ而、

一すハ、百廿文、諸品大高直、難書尽候、
(註)

右之通、凶年より当分難暮ス候、追々如何、

十四日快晴、日和ニ成、此嵐後ハ氣候直り可申歟、

七月十五日上日和也、暑氣也、十六日曇り、少冷氣、夜小雨、十七日半曇り、

十八日半曇り、同シ、九ツ時より晴、上々日和ニ成、十九日曇り、雨ニ成、盆

中十五日計り上日和、其外ハ毎夜小雨ニ而、海道庭等不直、誠以不順氣、不同

成天氣ニ而不定候、八百もの・木菓成物、至而不足、高直、子供之慰ものニ不成候、痛入たる世の在様也、盆中もさびしく候、

一稲の事、南中奥ハ式・三分通出穂之由、此辺ハ未ニ出穂ニ不成、出たる所稀也、併地勢能、氣候時節未若く、日和ニさい成候ハ、四・五分之作ニ可相成と、在方之衆咄居候、凶作之心かけなり、氣仙沼杯ハ、ふきの糧此節より専ら用、市中江出売ると、盆前より申候、此辺も、最早山かて取方ニ可相成候、

一御大名様方、皆公家様成、加州様始、御一統御領地ヲ上ケ、少身之御知行ニ而、京之御華族と為成、上京也、小大名、諸臣家之人々、皆京ノ朝臣と成、当分国元ニ而御用次第出勤ス、御大名方ハ直々其臣之由諸首尾成、元家中を御支配被成由也、

廿日曇り、昼より晴、廿一日・廿二日半晴、折々時雨、今日小風ニ而、至而冷氣、日和ニ相成候而も、日陰ハ寒也、日々雨氣、東風不止、

廿三日朝至而冷氣ニ而寒し、生糸取引未ニ無之候、此辺そろく稲出穂ニ成由、式百十日前、祭者昨日也、本日数ハ来ル廿五日也、

廿五日式百拾日定日也、今日雷神様精進、日和宜、先日十三日大嵐ニ而洪水、一ノ関、岩井川大水ニ而、両方町中江水揚り、山ノ目ノ方家三軒流失、たんす流シ而、金八拾両程安齊屋流失致候由、所々痛、

廿六日日和、晴曇り、大肝入殿ハ洪水痛義也、田畑不作容子見分御廻村也、日和ニ成候得共、朝夕ハ秋冷ニ成、此節稻出穂最中、如何様之作ニ相成候哉、不安心、

廿八日晴、曇り、毎日時々天氣、風替り不定、残暑と申暑さ無之、続而冷氣、雨氣、東風止不申、弥々不氣候、不作ニ成、

廿九日小ニ而晦日ニ成、米穀弥々引メ上ル、

一米、金壺歩ニ三升より式升五合ニ成、

外ニ穀物右ニ順し高直ニ成、

一小麦者、専ら凶作之節賄ニ成ニ付、拾式三貫より日増ニ登る、

しるな、糯等色々ニ成、

一濁酒ハ百廿文 とふふ壺ツ大セン盆前より拾文也、

一肴類も不足、至而高直、

一八百屋もの不足、高直^ニ而不喰候、

なす廿四・五文

此節専ら山かて取方也、右之通、諸品大高直^ニ而、甚困り、前々之凶作之年より難義之年柄也、中々以喰続六ッ敷事也、

当夏ハ蚊屋不用家多シ

八月朔日半日和也、時雨在、毎日晴曇り、六日廿三廻忌法事、振舞不致、近手廻り五・六人、仏参いたし候、

今日貳百廿日、天氣宜、此間貳・三日日和^ニ而、稻之出穂相応也、何様東山者凶作之見詰、併日和続候ハ、五分位^ニも可相成歟、余り節後レ^ニ相成、難計候、未押付見詰不成候、

そば、大こん、大豆ハ相応と申候、粟ハ皆無也、

一米者何分買人在之候得共、売人不進、困候、直段ハ定り無之、都而直段不同、米壹歩^ニ貳升五合、白大麦ハ三升位、五合迄、

一小麦ハ拾三貫位之所、南方ハ大^ニ引上、拾六貫より拾七・八貫迄と申候、当

年品ハ粉ニ不成候故、古もの引上、如此、

一 錢相庭、貳貫文壺歩取引ニ候所、六日御触ニ而貳貫五百文ニ成、兩ニ拾貫文通
用被仰触候、当国ニ不限、日本國中同様と申事也、

御城下も錢多ニ而、当町皆清殿方へ、大町問屋より此間百文錢ニ而大ニ下る、
右之次第ニ付、生糸も誰とも無之、思入次第小糸セリ買、追々如何、糸取引
散乱、定規無之、不分り、

一 當時の御代者 朝皇様より外、主君と被申御仁無之、大小名、諸家之臣家も、
皆々朝臣と成、但朝帝より之御触、御下知等者、元来之主人々々より、臣下々々
江被仰渡御扱と成由、国々御郡々々も名改の所在之、御役名も御改、御代官
名も替り、別ニ成、

錢相庭下直之上、金錢悪く、年柄不熟作、旁甚難義之時節、商人も一体ニ大
困り、

一手拭者八百文と成由、一油壺盆 盆中より八百文

一 濁酒壺盆貳百文ニ而も、米不足ニ而切る、

喰物売、右高直ニ而も望人多シ、恐入候、

一七日夜大ニ雨ふり、八日晴ニ成、余り不天氣勝

十三日曇り、毎日半晴、日和、晴天無之、夜ニ雨、

十四日上日和ニ成、今日宗兵衛後妻、米谷町佐藤屋より貰ひ迎取、

十五日雨ふり、日かん入日、乍併引続暖氣ニ而、稀々晴天半日ツ、在之、仍而追々
稲出穂大ニ立直り候由、半作ニも可相成と申候、十六日も昼前きり雨、晴ニ成、
夜又雨、十七日朝迄きり雨、

一天領七ヶ村肝入・検断・大肝入衆迄、前沢御陣屋・本の御居館宅へ被招呼、品々
被仰渡、

右ニ而百才老人、九十才迄天朝より式人扶持ツ、被下置、八十才已上壺人扶
持被下、七十才已上金壺歩ツ、被下候由、難在御事也、

一千厩表安藤様方御家老か御下リニ而、御領地御請取、御渡し方相濟、仍而
十四日御郡中肝入・検断中江、仙台様方より御役人様中御分れの御酒被下置
候、大肝入永澤氏ニ而御振舞、大肝入殿へ広(棧)さん壺反とか被下、肝入中江金

壺両ツ、検断中へ金貳歩ツ、被下置候由、

又、安藤様より大肝入江、上下壺具被下置候、御書付拝領と申候、難有事ニ候、乱世之折、大肝入ニ而御用多ニハ候得共、何角永沢氏大るニ運能、仕合之事也、門ニ市を成と申、此事也、愚老か実家、目出度々々々、肝入・検断引続拾五代之孫也、東山天料七ヶ村余者、拾四ヶ村之大肝入扱ニ成、御役料ハ先達而被仰渡金五拾両と四人扶持被下候由也、

一日かん中日者十八日也、十六日より毎日、十九日迄半日ツ、雨ふり、半晴、昨日ハ終日ふる、

十九日社日 稲ハ存之外立直り、五分位ニハ可成と申なれ共、何方も三升壺歩五合位迄売、

一米相庭 壺升代壺貫文から、麦六百文・白三升五合、

一浜方鰯大漁在、下直、拾兩百七八拾文、

鰹小大セン百文 から芋小売大壺ツ五文位、

桃・なし、常年壺文位之所、五・六文位、至而高直、

諸品高直、書難尽シ、無類之世の中也、

一昨十八日天料^⑧御支配 松平大和之守様御向役半給事と被仰、前々之御代官様可成、前沢より当町へ御廻村、検断弥市方へ御宿、七ヶ村肝入・検断被招呼、寄合也、天料^⑧ニ大肝入と申役無之、何レ肝入主立役御吟味中、

然ル所、又々別段御状到来、千厩江安藤様御事、御本国江被相戻候由、仍而仙台より御借受粗大麦御払ニ成由相聞得候、誠ニ以転変多し、外色々噂在之、天下不定、仍而天之氣候不定秋ニ成候而も、晴日無之、不同、

登米郡御境江、印杭相被立候、從是陸中国

東山藤沢本郷 松平大和守取締り
御料地

廿日晴、曇り、廿一朝白露、寒日和ニ成、

当所御居館も御覽ニ成、

一稲作も追々直り、五分位之作ニ可相成容子ニ而、穀物緩ミ可申、人氣宜、一ノ関ニ而米壹升八百八拾文、千厩引着九百拾文、

当町千厩町同直ニ而壹貫文

大麦ハ、当時壹俵拾三貫文

氣仙沼、米六斗ニ而八拾貫より九拾貫迄売、此節拾七貫文下る、六拾貫台ニ成、

一千厩表安藤様、御本国江御引移ニ付而ハ、跡ハ當時当所同様、朝御料ニ成、

一安藤様ハ、京都江献上金、外様并御同家より金六万兩献上

庄内酒井様より五拾万兩

南部様より七拾万兩也

右之通御献金ニ而、御本国江御歸り被相免、御引越之由也、仙台様ニ者、貳

百万兩も被指上候ハ、御免ニ可被為成候由、噂さ計り承る、

一嘉永度御出馬御仮屋御殿、漸々先達御領地御渡之調節、願上候上ニ而、地元

江被下候由被仰渡、宮三郎頂候訳也、大ニ損し候、急之有物上候分、却而損

ニ成、

八月廿八日、此間三日程雨ふりニ而、廿六日より上り、日和宜、今日当吉、昨

朝より白露、朝冷氣ニ成、

追々作合直り、所々不同、南も古川辺、中新田辺、大崎洪遠第一宜由、最初

(詳上)

ハ大ニ騒キ、白米壹升壹貫四百迄上り、四・五日之暖、日和直り、米下落候、八百五拾文ニ下る、当地も此間少し下る、当町ハ未玄米一升壹貫文、白壹貫貳百文、白大麦ハ五合下り三升壹歩位、買安く成、

大ツ者雨勝故、存之外不宜、そばハ宜、都而作物後レ、実入不極候

一大政官ノ札も、此間所々より通用来ル、正之貳歩金ハ、徳川將軍家出之金計り好而通用、余ハ下直ニ而も嫌ひ、不通用也、古ノから金錢ハ、壹文ハ当小セン拾貳文之割通用大センハ小セン同様通用ス

一生糸者、伊達辺下落、貳百五拾兩前後、右ニ付当国方、此辺而者未ニ一向買人

上印

無之、取引無候、元上りハ三百兩位、当時損金物、

九月ニ成、少々心見の取引初る

一廿八日、此間者天氣宜、稲并畑物共ニ直り、追々穀物緩ミ、人氣少々宜、米直段、壹升九百文五十ニ下る、大麦者三升五合之割ニ成、外未タ高直也、

油ハ壹盃八百文、醬油壹盃貳百四十文より安物、南部品貳百文位、

糶壹升八百五拾文ニ成、追々米も下る含、此節糶入方願人多シ、平治方ニ而

も願出る、

九月朔日、此間者氣候冷氣落付、日和続而、五日も宜、千厩高市芝居立候、世柄あしく、商人不寄也、

七日、津谷川町ニ而富岡寄合、近頃諸物高直ニ而、錢高多成、壺品物買入六ッ敷、売ひ無之、仍而魚類ヲ始、諸品圖取ニ成、諸商人小物迄も富くしと成、専ら流行ス、

一料紙壺帖、上百廿文位より、蠟燭も百拾文、百文、

一糸わた金壺歩ニ五拾目、繰綿壺本ニ而金三拾七兩位、当年も綿至而不作、品不足、弥々高し、

一はたご代、道中筋壺貫三四百文、但九六せん之わりニ而、

一油も弥々高直ニ成、壺盃小うり壺貫文位ニ成、

一平治糶入方願も、本家嘉市名代ニ而御下知来る、

此間者天氣、日和続キ、望願人多シ、七人程、穀問屋も多く成、

九月九日靜成日和也

十一日より十二日雨ふり 此間伊達衆下り、糸買始り、

十三日上り日和

生糸者三百四・五十両より五・六拾両迄、小糸計り売、

一米者此頃相応出米在而、心能買、

直段ハ貳升三盃位、代ニ而九百五十文より九百文位、問屋より少し安く、小手米也、

一大ツ壺升五百文、小ツ四百文、

一濁酒壺盃上貳百四拾文より、

外南御郡者米直段緩ミ下る、佐沼ニ而五升ニ相成候由、

一蚕種、伊達も至而不足ニ而、大ニ高直、仍種引衆遅く下り、常年之半高も持參、大判壺枚金拾両之割ニ而、半枚物金五両ツ、申、大高直ニ而、人々恐入候、置者も少シ、尤種売も数年之得意方へ計り、大方壺枚か貳枚ツ、金現銀ニ而、貸付無之、金無之者者不置候、

一糸買方者、他国衆勝手次第ニ入込、但仙府領より入候故、御城下ニ而夫々首

尾を相受候由 大政官之御かん札御書付申受買方也、

追々上り清水川^(志津川)江四百五拾両ニ成

一 津谷口上糸三百八拾両売候由、跡々当地之糸も上四百両^(マ)四百両^(マ)ニ可成様子也

位ニ成

皆大錢者小せん勘定

一 鉄ノ新大せん、如小せんの通用ス

古大せん壹文、当小せん廿四文之割

同文せんハ 同拾六文次、古せん拾貳文

並小せん八文より六文

右之割合通用ニ成、

一 大工日用、五日壹歩、一日五百文、

農業日手間ちんの割より安し、

一 釘壹寸五分、壹本五文也、四文之所壹文上る、

一 九月十四日日和、半晴、暖氣、

都而鉄大せん者、元之小せん同様、直段大せんニ而五文、拾文、百文、貳百

文共ニ、大ニ而互ニ申通用、

金銀色々在善惡、次第在而札も同様、大ニ時之替り在而、損益在、至而通用六ツ敷、商ひ諸通用人々困り、持合不成、世の中尤諸品高直成事、前世後世共ニ在間敷世の中也、金紛乱押付無之候、生糸も高直ニ而、忿々敷不買、買人も多く無之候、

一当年諸作、稲追々直り候由と噂、一頃人氣能候所、近頃追々霜ニ当り、善惡正体あらわれ、至而不宜、存之外見違、誠以凶作なり、仍而穀物弥引メ不下候、殊ニ又麦蒔き、又ハ畑物取仕舞鬧敷、米売人も無之、市中不足ニ而、小買之者大ニ迷惑、直段

一米式升五合ハ上ニ而式・三合、式升迄、壹歩引上ル、

誠以米ハ不喰時節と成、

一大麦も式升五六合 種麦壹俵廿五・六貫、廿八貫文ニ成、

一小ツ壹升四百五拾文

一濁酒壹盃式百四拾文 酢壹盃小四百文

一とふふ小三拾文 大ツ無之、当時切物ニ而不用、

一古わら壹把小廿文前後大ニ高し、

此節平治方ニ而糶室拵ニ付買入、

廿五日保呂羽山祭、廿日より御遷宮、七日之内至而不盛也、參詣之者持弁ニ而、小休屋休者不足、酒も不売、菓子も同し、茶屋稼損ニ成由也、

一濁酒造方も被相留候御触相廻り候事

一前沢表御陣屋も、御役人様御替り成而、役付中罷出、水沢江御引移りニ成由、一廿七日飯後より雨、千厩表安藤様方御役人中も、今日当町通り御登り、御本国へ御引込之由、当分当所同様、未ニ御上も諸事不定事也、

一南方御郡も、村々穀物村切駄送留ニ相成候、他村他郡之買入不相成候、佐沼町三升壺歩直段計りニ而、出米無之、大ニ引メ、買入ニ遣候得共、買兼帰る、式升五合迄売る、

栗・柿外、菓もの無之年也、子供は迷惑ス、長人同様、

金銀錢不同、不宜、通用ニ困る、

一当町廿八日米式升壺歩也、

糯米新同式升壺歩、至而性勢よわし、

町方かり揚糯米式升ツ、調へ、

米不入、雑穀・草糯米計り多し、誠之凶作也、併在方ハ雑穀、根花粉用へ、町

方より不騒、静^ニ而宜、専ら根花ほり方、此間者天氣続而宜、専ら麦蒔方也、

十月朔日、至^而此間中、今日も暖氣也、

大こんの作も、虫喰多、不宜年なり、多くは盜れ、大^ニ困り、稻、大こん共^ニ、寄合^ニ而番人を付^而守る、稻取納る家多シ、

一徳治、佐沼^ニ而最上清酒八樽買入、持参ス、壺盃五百文渡、小売屋^ニ而六百文位之売、それ^く買入在、併高直物故、氣仙沼へ持参ス、誠以恐入世の中なり、米不喰中^ニ、六百文之酒買入、吞者在、

当年之作者、以天保七申凶作より不宜と申、追々騒キ、秋八月中ハ四分位に見候所、追々悪く顯れ、三分通^ニも不成容子^ニ而、米穀物弥々引^メ、十月六

日平治方室打方出来ス、七日日和宜、霜、

一麦蒔方も後レ、村方此節迄蒔付る、

大こん積方^ニ成、一体不作、

一米市中不足、式升壺歩、壺升^ニ付壺貫貳百五十文、

一弥々不足^ニ而、壺升^ニ三盃迄

一とふふ壺丁五拾六文_ニ成、大_ニ而十四文也、

一塩壺俵九貫文と申候、此節引上候、

先日氣仙沼_ニ而七貫文七五位、買入之品追々引上る容子也、

一米、若柳_ニ而四斗入壺俵八拾壺貫文、金_ニ而式升五合位

当町へ引合_ニ成、

一当御年貢方 何程之御割合上納_ニ可相成哉、未_ニ不分り、徳田村ハ三分位御見詰之由、

道中はたご代三朱位、昼通三貫文より余、

十月八日日和、

一御城下ハ至_ニ而不景氣也、御大家御屋敷方并外屋敷々々より、此節出候品、家具勿論、結構成御小袖之着類多く出候得共、買尽し難く、誰買人無之、下直と申せとも、可買様無之由なり、

東京表も同様、けん_(絹布)ふ類大下落、誠以前々之凶年より、御上下共_(減じ)難義、何方共飯料米至_(減じ)而けん_(減じ)し多く不用、前々無之凶年と成、米不入、糲専ら用る、

御城下ハ壺歩ニ三升位ハ御払なり、御郡々御指留無之候得共、村切留る、

十月十五日日和、昨日雨、

一米、此間所々出米在之、直段少々下る、

古不足ニ而式升壺歩、新式升五合、

大ツ壺俵廿八貫文位、小麦廿六貫文位、

蕎麦廿四五貫文高直也、小ツ三拾貫、

大こん壺駄貳貫七八百より三貫文、壺本中廿文位、

真糯〇元来五文位之品、当時壺つ百文位、

此節ハ糠不売也と申候、

飯江入る米ハ、常かて飯江入る、粟を如入也、何方も同様、米ハ何分不用様
ニ賄ひす、野山之草も、喰物ニ成分ハ一円無之、皆々摘取、此程大こん葉糯
流行ス、是ハ余の草より宜、奥方者天保七申凶作より不宜、誠諸品大高直、
当分ハ飢死人する者未不聞、不作続ニ而馴候か、

十八日戎子講、市米貳升五合、

大ツ三拾貫ニ上る、蕎麦廿八貫より三拾貫文、此品も大不作、常の三ヶ壺と申候、そば者沢山取候得共、在方専ら米の替りニ用、売人至而不足ニ而高直、

一肴物高直、些天成鮪足壺本、大セン百拾文位、

どんこ壺連大セン三百文位、

南物海老壺升大六拾文、高直、

塩壺俵拾壺貫文、大こん少下る、壺駄貳貫五百文位、

四百文

一御上之事、奥方ハ水沢御館御陣屋と成、一ノ関様も御替地と成、千厩扱七ヶ

村共御領と成、栗原金成町へ御陣屋立、是ハ中頃のよふ也、

仙府の御城者、奥方惣元メと聞へ、水沢より千厩へ御役人御出張相成候由也、

屋形様御事も、御知行地三万石位之由、御役料金壺万両京より被下置候由、

外御一門様中并御大家方御扶持方ニ而、御用次第御役料金ニ而被下置候由、

一ノ関様ニハ、松前御番被仰付候由、

廿八日市、米相応ニ相出ル、尚又少々、新下る、

貳升三盃新米也、小手米壺貫文八百文ニ成、

若柳ニ而五升壹歩ニ下る由也

四斗五合

此節塩少々下る、九貫文位ニ成、漬物此間休ミ、

十一月朔日日和、さらく小雪ふり、

三日市、米新三升ニ下る、

小売余慶売不申候、糶屋杯買入、

そば望人多、売人無之候、

とふふ小せん五拾文位、大拾三文、

せうゆ売人無之、三品共ニ高直ニ而、醤油造り方仕込難成、

一仙府表諸荷物仕入物、百分壹銀之割、

但前々者、木綿ニ而も安物又ハ白杯ニ致、銀高少く書出、御仲役上納致候所、

大政官より被仰出、品物次第ニ而明白ニ上・中・下直段を以、仲役可相納

由被仰付候ニ付、是迄式歩位ニ而相済候所、是より三両も四両も相納候様

ニ成、大ニ迷惑ニ相成候由也、

一仙府表御屋敷方大崩れニ成、大屋敷・小屋敷最寄々々ニ而御払ニ成下候方諸方也、諸家材道具売払ニ成、町家別而市日之事ニ成、北之方二日町 南ハ穀町・材木丁辺、両所ヘ市日被相立、諸品出見世張出、諸商人大ニ入込、取引高下さまくなり、諸道具・絹布類下直、

一当年稲并諸物大不作、藤沢村より正米上納分拾四石程、大豆ハ金納之由、未直段不分り、格別御恵ニ成由、尤本凶作也、

一当町米直段、白米壺升九百文・糶八百五十文

一大ツ廿七貫文 小ツ壺升七百文

壺俵三十五貫文ニ当ル、

一濁酒壺盃貳百四拾文

一油大ニ高シ、壺盃壺貫百文位、

からし壺俵五拾貫文と申候

氣仙沼ニ而大ツ三十貫文

一道中はだこ代壺貫六百文、上古川町壺貫五百文

此節盜人、又強盜、又ハごまのはへ、宿々共多、金子并諸色盜まれ、推取れ、

所々諸人難義、道中尤安々往来難成候、

十一月廿日冬至ニ成、前々より相応之寒氣、雪薄く候得共、度々夜々小雪ふり、此入日少々緩ミ、小雨より雪、廿三日日和也、

仙府も國中未タ不定、大町衆上方仕入見合居、当冬成諸品不足、奥方商人中木綿・古手大概不足也、

一生糸ハ高直、四百両前後、少々ツ、売、乍併残リ在不売候、

十一月廿六日夜相応之大雪、廿七日ニもふり、暮方ニはれ、去年冬至中雪無之、当年ハ小雪度々在而、廿六・七日ハ六寸已上、雪寒氣も強く相成候間、明年ハ諸作豊熟可相成と人々相唱候、少々人氣宜候、廿八日大ニ寒氣強し、

諸品高直ハ可申様無之直段、仍而御上諸上納物、御年貢共御恵在、色々御仕法替リ在、

一氣仙沼塩、行望次第願可申出被仰渡、金次第入金分買入ニ宜、塩場之方、御

上御前無之、皆手前仕込と成、

諸品諸問屋向、右之姿ニ可相成候事、近辺ニ金持無之、未事不調、

一十二月朔日、其後雪無之、晴候へ共、緩ミ消流れ不申、寒し、

一地県事、千厩御出張御会所、当時三拾人已上、余郡ニ者大肝入無之候得共、東山百姓前都而御取扱振御不勝手ニ付、直々永沢茂兵衛へ大肝入役被仰付、被立置候間、諸事永沢方大ニ御用多取込候由也、未ニ御旧領方御取都も不濟事哉、

十二月十五日晴、天氣宜、此間夜々薄雪ふり、大雪無之候得共、寒氣者相応之冷ニ而、相当可成候、大寒廿日、此間続而寒氣相応也、当年者寒中ニて雨無之、大緩ミ無之候、越年寒也、

一諸相庭之事、都而高直、

木綿・古手、下り物者去々年より乱世成ニ而、仙府問屋中仕入不足ニ而、卸方

荷切故、在方品不足、弥々高直也、

一糸綿、金壺歩ニ四十五目、

但錢不足ニ而、専ら錢を好、右ニ而五十目売、

新金多尤金性不宜物多シ

上ハ貳貫五百文、貳貫文、壹貫文、六百文迄在之、

金通用至而嫌ひ多ニ而、不通用故也、

一米者、廿日頃迄三升より壹盃迄之所引上リ、

廿八日市、貳升五合ニ成、大ニ上リ、

一大ツ 三拾貫文、不動すわり、

一小ツ 壹升八百文

一実からし 壹俵六拾貫文

一油 壹盃壹貫貳百余

一濁酒ハ大せん六拾文

一蠟燭 五目かけ大四拾文

一上料紙 壹帖大三拾五文

一ちり紙同中ノ下大廿文

一皮緒下並緒通大セん五拾文より
百廿文位より八拾文

一魚塩鯉 壹本大セん
四百五十文より六百文迄

一鱈壹本 大六百文より八百文

大セん 壹貫文位迄大高直

一鮑 中壹ツ 大ニ而廿文位

右之通、都而高直、無申計候、

一諸上納方、米正米上納

大ツハ金壹歩ニ五升、直ニ而御勘定、

右ニ而

藤沢村より金高五百兩余と申候

一詰市々不盛、喰物計り相応ニ売れ候由也、

一新曆者、仙府も相出候得共、他国物多く来る、売候、大セん六拾文位、

一市々、町何方も不盛、天保申凶年同様、甚敷難義ニ相聞得候、米者何分ニも
用ひ不足、余品拵方、古より利口弘者^弔ニ成、能く用候、併来春ハ続兼候者多
く可在之由也、

明治2年12月

一廿八日夜、薄衣村柳木俊治殿焼失致候、

近年大ニ福敷、金穀相应ニ候所、此度丸焼と申程焼痛候由也、